

視点 流れながら流されず

予算委員会 専門員

むらまつ みかど
村松 帝

近年の社会の変貌は地殻変動の規模で起きているといったら、言い過ぎだろうか。とうてい一言では説明できないほどの変化を多くの人が実感している。

変化を起こしている背景は、内においては戦前派から戦後派へと世代交代が起きており、これに類例を見ない急激な高齢化と人口減少が始まったことが追い打ちをかけ、社会の基盤となる世帯や家族構成に構造的な変化を生じ、価値基準の著しい変化をもたらしていることである。また、外においては驚異的な成長を続ける隣国中国や力を発揮し始めたインド、力を蘇らせ始めたロシアなど、いわゆるBRICSと呼ばれる諸国の台頭によって国際競争が一段と激化していることが挙げられよう。地球規模の経済地図の塗り替わりによって我が国の比較優位性が劣化し、好むと好まざるとにかかわらず「変化」を余儀なくされているというべきであろう。

変化は随所に見ることができる。社会道徳や公衆道徳の社会規範の乱れは今更言うに及ばず、物事の善悪、是非までもが危機に瀕している。目を覆うばかりの凶悪犯罪の多発は、社会の秩序や規範の著しい希薄化を物語って余りある。社会の伝統行事が年々簡略化され、表層的になっていくのも、人々の共同体意識が薄れつつあることの現れであろう。変化は社会規範のみならず社会の制度・仕組みにも及んでいる。組織の中の私たちには、こちらの影響の方がより大きいのは当然である。

長年日本型システムの代名詞のように言われてきた年功序列型の人事制度や給与体系は、競争の導入によって多くの組織で能力主義や成果主義にとって代わられた。会社等組織の業務や財務内容はガラス張りの透明性が求められ、会社は従業員のものから株主のものへと、その意識を大きく変えられた。今や社会と人々を動かす行動原理は競争であり、そこでどれだけ収益・成果を上げたかが価値判断の尺度となりつつある。これまで競争に馴染まないとして変化から身を遠ざけてきた公務員諸制度も、いま大きな変化の渦中にある。昇給や勤勉手当の評価制度が導入され、業務の市場化や効率化をより重視する観点から定数の削減も始まった。

競争の強化という「改革」こそが内と外から押し寄せる変化の荒波を乗り切る唯一の手段のように位置づけられ、いまや奔流となって日本中を駆けめぐっている。風が吹いているとき、すなわち世の中に大きな流れができたとき、その流れを止めることはできない。まして逆転させることなど不可能である。

しかし、単に流れに身を任せるだけでは自分を見失う。大きな流れの中では「流れながら流されず」を、胸に刻んでやるしかない。流れながら流されずとは、反対したり従わないことではない。流れの方向とその先の着地点が自分の座標軸とどの程度異なっているかを見定め、流れの中に身を置きながらも自分なりの新しい座標軸を作る努力をすることである。しかし、議会スタッフとしてのキーストーンは、責任感と透徹した議員サービス、能力の向上であることは言を待たない。今は、その着地点がまだはっきりとは見えていない。いつの時代も手探りの試行錯誤が続く。